

## 状況意味論からチャンネル理論へ

オーガナイザー：菊池誠（神戸大学）

堤題者

山田友幸（北海道大学）「チャンネル理論から見た言語行為の動的論理」

岡本賢吾（首都大東京）「不飽和命題・様相／時間制・情報射」

菊池誠（神戸大）「状況理論としてのチャンネル理論」

状況意味論は 1981 年に Barwise と Perry による「Situation and Attitude」によって提示された自然言語の形式的意味論である。状況意味論の特徴は状況を自然言語の意味を議論するときの基本的な概念に据えて、言葉の意味を発話の状況と記述された状況の組で表現することにある。この状況意味論は我が国でも積極的に議論され、計算機科学や言語学等において研究が推し進められてきた。Barwise は 1989 年に Etchmendy と共に「The Liar」を著し、Aczel による Anti-Foundation Axiom を持つ集合論の上で状況意味論を展開して、その上で「嘘つきの逆理」を分析した。この議論は 1996 年の Barwise と Moss による「Vicious Circles」に引き継がれた。

状況意味論の発展に従い、状況意味論の基礎理論となるべき状況理論の必要性和重要性が強くなり意識されるようになり、状況理論の研究も始まった。しかし、2000 年の Barwise の突然の死によって状況意味論の研究は急速に勢いを失っていき、表面上は状況意味論の研究は既に終焉を迎えているようにも見える。しかし、状況意味論の研究が衰えていったのは強力な指導者を失ったことが最も大きな理由であり、理論そのものの限界や瑕疵が明らかになったことによるものではない。

さて、Barwise は 1997 年に Seligman と共に「Information Flow」を出版している。この Information Flow は Dretske によって 1981 に書かれた「Knowledge and Flow of Information」で展開された議論に基づき、「情報の流れ」を扱う形式的ないし数学的な理論である Channel 理論を提示するものである。この Information Flow において状況意味論は参照されておらず、Channel 理論は状況意味論とは独立の新たな理論であるとも考えることもできる。また、数学的には Channel 理論で展開されている議論はカテゴリー論の一種または Chu Space の理論の特殊な場合であると考えられるので、Channel 理論のオリジナリティの高くないという考え方もある。

しかし、Channel 理論の内容や周辺の議論を吟味すると、Channel 理論の面白さは数学的な枠組みとしての新規性にあるのではなく、Channel 理論こそが状況意味論の基礎理論としての状況理論の新たな幕開けとなるべきものであったことであると推察される。そして、Channel 理論の上で言語、知識、情報について議論することで、80 年代の状況意味論が到達しえなかった新たな局面を切り開くことができる可能性が期待される。このワークショップでは三つの異なる視点から、状況意味論と Channel 理論が今でも持ち続けている可能性を検討してみたい。